

自分たちの生活は自分たちで支える
“村営百貨店”



常吉村営百貨店
京都府京丹後市





今年の四月に六町が合併して誕生した京丹後市。旧大宮町の中にある常吉地区、その田園風景の中にひよっこりと建つ平屋。それが常吉村営百貨店だった。何でもあるから「百貨店」、地元住民の出資だから「村営」。農協支所の閉鎖に伴い、生活が不便になる。そのために、農協の機能にとどまらず地域の農地を保全するための農作業受託や農産物、食品、生活雑貨などの販売まで取り扱う施設を作ることにした。大木満和さん（現社長）を中心に有志三十三人で三百五十万円を出資してその他農協から三百万円の融資を受けて、有限会社としてスタートしたが、平成九年だった。織物と水稲のまちだったが、織物業の衰退により過疎化と高齢化が進んだ山間地。戸数約百四十のこの地区で、誰かがやってくれるのではない、自分たちのアイデアで元気を出さなければと、あの手この手を繰り出してきた。収穫の秋を控える九月初旬、すっかり常吉の風物詩となったパンプキンフェスティバルが開かれた。路傍に「ふるさと再発見キャンペーン 収穫祭 パンプキンフェスティバル」の幟が風に揺れていた。

おばあちゃんが手押し車を押してピーマンやじゃがいもを運んできた。明日の朝市で売りに出す野菜たち。普段でも近隣の農家から収穫物が持ち込まれる。大木さんたちは、高齢者の生きがいづくりのためハウス一棟を提供し、老人会による野菜づくりにも取り組んでいる。取れ



たものはすべて百貨店で売る。こうして「作ったら売れる」というシステムも確立した。売り上げは百貨店と農家で応分する。

翌朝、フェスティバルの始まる時間のずいぶん前、一人のおばあちゃんが「また邪魔になり来たで」と手伝いに来た。わいわい言いながら二個二百円の握り飯をつくっている。百貨店では、独居老人の安否確認のために電話による生活必需品の宅配サービスも実施している。地域の高齢者は地域で守るシステムも確立したといえる。

前日持ち込まれた八十キロほどのカボチャの前に、土作りから特別な方法で丹精込めて育てあげた巨大なおばけカボチャについて話を聞いた。「食用にはなるんですか?」「食べて食べられないことはないけど、おいしいもんじゃない」とのこと。その時一台の軽トラックが会場に入ってきた。一瞬周りの人たちから「おー」と嘆声もれる。「これが今年の優勝候補や」と隣にいた子どもが教えてくれた。大人が七人がかりで計量器に移すと、針は百八十キロを指した。おばけカボチャと子どもを並べて記念写真を撮る親たち。上の写真を見ればカボチャの大きさが分かるだろう。一キロ当たり五十円で販売される。お代は翌年のカボチャの種代となる。その種で来年またおばけカボチャの出来具合を競うのだ。

京都府の南、遠く離れた和束町から自動車を



駆ってやって来た堀健さんは、百四十五キロ強
 のカボチャを持ってきた。都市と農村の交流も
 テーマ。「都市」の人たちにもカボチャの苗を
 送り、育ててもらい、このフェスティバルに参
 加してもらっている。その中の一人、堀さんは
 見事準優勝となった。優勝（「パンブキング」
 と呼ぶ）は先ほどの百八十八キロの鈴木五郎さん。
 団体賞は弥栄高校分校の農業クラブ。毎年八十
 キロ前後のカボチャを出品する。「目指せ百キ
 ロ、やっていますがかなかむすかしです
 ね」と岡田英樹先生。今年は夏に雨が少なく出
 来がよくないとのこと。この大会の過去最高は
 二百七十キロだというから驚きだ。

いろいろやって楽しみ、農業を見直し、常吉
 に住んでよかったと思ってもらうことが大切な
 んだ、という思いがメンバーたちを動かした。
 「町や市に文句ばかり言っているのもダメ。自分
 たちでなんとかアイディアを出していくのが地域
 づくりなんだ、と思った」と大木さんは言う。
 なんとかみんなで
 「村」を活性化しよう
 という思いを込めて
 村営百貨店の看板を
 掲げて、過疎地から
 「元氣」を売り出して
 いる。

連絡先

常吉村営百貨店

京丹後市大宮町
字上常吉123-2

TEL 0772-68-1819